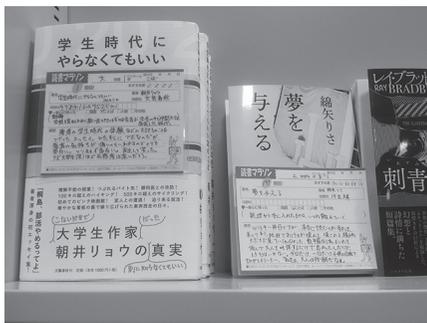


大学生協・書籍部の様子から見る 学生文化の変遷

山野 薫
(京都大学大学院農学研究科博士後期課程)



読書マラソン・コメントカード付きの書籍

大学生協は大学生の生活を支える最も重要な組織のうちのひとつである。しかし、大学生協も組合員のニーズに応えるために、取り扱う商品やサービス内容などを少しずつ変化させて、常に利用してもらいやすい組織であろうとしている。

本稿では、大学生協・書籍部¹⁾の商品ラインナップ・売り上げの変化や、読書推進活動の様子から、ごく一部ではあるが学生文化の変遷を見ることにする。

大学生協・書籍部の歴史

まず、大学生協で書籍事業が始まってから現在の体制ができるまでの様子をごく簡単に見ておきたい。

大学生協の書籍部がいつ発足したのかについて、正確な記録は残っていない²⁾。もちろん、どの大学生協がはじめに書籍部を立ち上げたのかも不明である。しかし書店に残る記録では、1960年ごろから取引をおこなっていたようである。

当時は各大学の中に書店があり、その書店が教科書をはじめとする書籍を取り扱っていた。大学生協が書籍を扱うようになると、それらの書店との間に摩擦が生まれるため、全国各地の大学生協関係者は書籍事業を開始するに当たって、相当な苦勞をした記録が残っている。また、書籍事業開始後も取り扱える商品や取引できる問屋が限定されているなど事業運営に関する条件がいろいろあり、現在のような充実した体制を整えるためには職員、学生、大学が一体となって、閉鎖的な日本の出版業界に対して様々な運動を行った。現在では学内に書店が存在する大学はかなり少なくなり、大学生協が書籍部をもつ場合が多い。

商品ラインナップと 売上げの変化

大学生協・書籍部の売上げ金額で最も大きな割合を占めているのは教科書（教員が授業で用いるために指定する図書）である。これは1970年ごろも現在もあまり変わっていない。次の主力商品である文庫・新書は、1990年頃までとそれ以降では様子が異なる。ある国立大学の場合、教科書を除くと、90年頃までは岩波新書が1ヶ月の売上が100冊前後で、ほぼ毎月ベスト1だったが、現在は村上春樹、有川浩、東野圭吾、伊坂幸太郎、森見登美彦、万城目学など一般書店でも支持の高い作家の商品が上位に来ている。また、大学生協全体として見てみると売上げ点数の中で文庫・新書が占める割合が増加してきたのも、このころからである。この変化の原因はいろいろ考えられるが、岩波新書を好んで読むことが学生のステイタスでなくなってきたこと、あるいは新書の内容が専門書並みに充実してきたことも手伝って、授業の教科書として岩波新書以外の新書や文庫を指定する教員が増えたことが挙げられる。また、近年ではコミックやライトノベルを扱うところも増加している。これらの分野の書籍は長年、大学生協・書籍部が扱うのはご法度とされていたが、現在では、これらの新刊が週間売上げ点数の上位を占めることも珍しくない。現京都府生協連専務の横山治生氏は、自らの大学生協・書籍部勤務時代を振り返り「よく売れる書籍の傾向や組合員のニーズは、特にリベラルアーツ教育がされなくなったころから大きく変化してきた」という。実際、時代を超えて読み継がれてきたような本が売上げに占める割合は少なくなっている。

大学生協・書籍部の売上高は、97年頃をピークに下降線を辿っている。また、学生生活実態調査によると、1ヶ月の支出のうち、書籍代が占める割合は75年から、1ヶ月に使用する書籍代³⁾は80年から下落している(図1)。読書時間も減少傾向にある(図2)。いわゆる若者の「活字離れ」が最も大きな原因であることは明らかだが、文庫や新書に比べて単価の高い専門書の購入を学生が嫌がるようになったことや、スライドなど自作の資料を使用するために教科書を使用・指定しない教員が増えたことも背景にある。2000年以降に、電子辞書が登場・普及しはじめると辞書の売上げが、インターネットの普及で地図の売上げが急落した。

週間売上げ点数の上位をコミックやライトノベルの新刊が占めることは上述のと

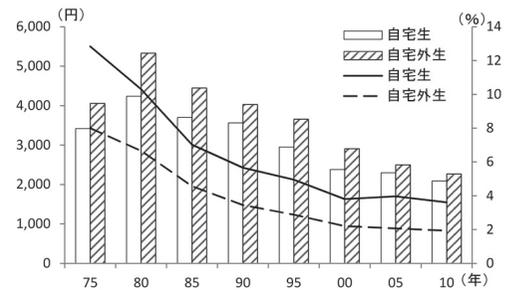


図1 1ヶ月の支出に書籍代が占める割合と1ヶ月の書籍代

出所：「学生生活実態調査」より筆者作成

注) 棒グラフは1ヶ月の書籍代(円)、折れ線グラフは支出のうち、書籍代が占める割合(%)を表す。

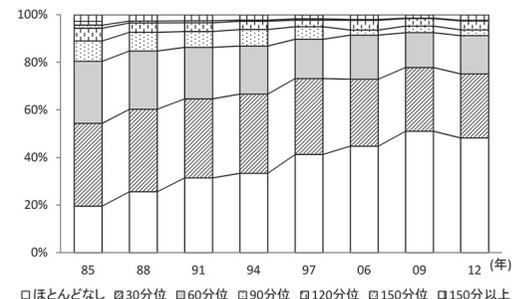


図2 1日の読書時間の推移

出所：図1に同じ

おりだが、それ以外では国家試験、公務員試験などの試験対策関連の書籍が上位にランクされている⁴⁾。大学生協・京阪神北陸統合事業部の鯉迫伸一氏は、「最近の学生は教科書であっても必然性を感じないと買わなくなっている」という。

現在では、このように商品ラインナップも売り上げの内容も、一般書店とほとんど変わらず、大学内にある組織としての独自色は薄れてしまった。

読書推進活動ー「読書のいずみ」から「読書マラソン」へー

1970年に創刊され、現在も全国大学生協連合会が発行している小冊子に「読書のいずみ」がある。この冊子の発行は、大学生協・書籍部が最初に学生へ行った読書推進活動であり、最も長く続けられているもののひとつである⁵⁾。創刊時は社会科学、自然科学の分野別に、学生への推薦図書とその解説を記載した「図書目録」だったが、1981年からは対談や作家へのインタビューなどに加えて、大学生活に役立つ情報を書籍と一緒に紹介し、いろいろな記事を通して読書に関する話題を提供する雑誌形式に変わった。81年は学生生活実態調査で1人あたりの1日の読書時間が1時間を切った年であり、新聞などでも学生の活字離れとして話題になった。特に教員の間で危機感が高まり、「大学生協の書籍事業、読書推進活動」というテーマでシンポジウムも開かれた。その後、80年代は読書推進活動が急速に盛り上がり、学生が発行する書評誌上で、あるいは教員が授業で読書指導として様々な本を紹介し、読むきっかけづくりを進めていった。しかし、90年代になり、読書推進活動は停滞期に入る。

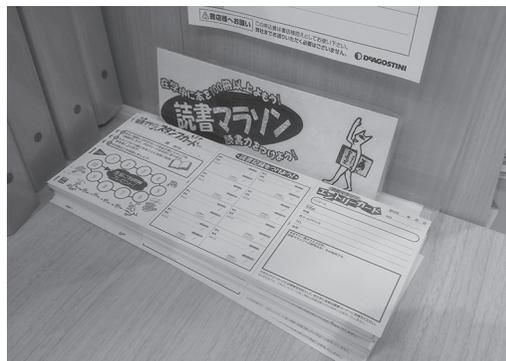


図3 読書マラソンスタンプカード

90年代は書籍の売り上げも減少し、読書推進活動だけでなく、書籍事業そのものが停滞した時期でもあった。

そんな中で2003年に新たな読書推進活動がはじまった。それが「読書マラソン」である。「読書マラソン」とは1冊読むごとにスタンプをため、10冊分で割引券と交換する一方で、学生は読んだ本のコメントをコメントカードに書く、というものである(図3)。大学生協・書籍部ではこのコメントカードをPOPのように書棚に並べることで、「必読」や「指導」とは無縁の同世代の学生からの読書のきっかけを提供できる。「読書マラソン」の特徴は書籍部が考えて、方針を出して行ったのではなく、学生のアイデアを元にはじめて、次第に全国へ広まっていった点である。学生同士や学生と生協職員の間で交流が生まれたことも、これまでの活動とは大きく異なる点であり、効果のひとつである。活動に熱心な学生がいると盛り上がるが、4年間で学生が入れ替わってしまうために、大学によって活動に栄枯盛衰があったり、大学ごとで取りくみへの温度差がかなりあったりするというのが現状ではあるが、「読書マラソン」も「読書のいずみ」(図4)も、どちらも現在では学生に本を読んでもらうための動機付けの要素がかなり強くなって

いる。図2からもわかるが、読書時間の長い、つまり本を読む学生の割合は80年代も現在もほとんど変わらない。鯉迫氏も「本を読まない学生に、どうやって本を読ませるかが課題」と言う。

書籍、他人との付き合い方を学ぶ場に

同氏によると、大学生協・書籍部の店舗内で、本棚から本を手に取り、中身を見て購入を吟味する学生の姿が減ったようだ。つまり、買う書籍を事前に決めて、あるいは誰かに指定されてから店舗にやってくる組合員が多く、何かしらの興味・関心をもって来店し、店頭で、自己の意思によって商品選択をする学生が相対的に減少しているのではないだろうか。加えて同氏は、店舗やサービスの改善にもなるので、まずは店舗に足を運んで欲しい、そして店舗を利用できなかった場合は、どんな書籍が欲しいのか、

どんなサービスを求めているのかといった要望を職員に伝えて欲しい、とも言う。

また「生協組織」自体に構成員の一員として参加し、「読書マラソン」のような形だけでなく、何らかの関わりを持ってもらうこと、人と接するうえで自分から発信する能力をつける場として活用してもらうことを学生に望んでいる。

書籍との付き合い方や他人との関わり方は、その時代の文化を少なからず反映している。今回は大学生協・書籍部の様子の変遷を見たが、ここからはその時代の学生の文化だけでなく、意識や風潮を読み取ることができた。時代の変化に伴って学生も文化も変わることは避けられないが、残すべき文化もある。当たり前なことだが、大学

生協・書籍部の歴史をみるとそのことを再認識せずにはいられなかった。



図4 「読書のいずみ」2013年3月号

- 1) 本稿では大学生協のなかで書籍関連の事業を行う部門を「大学生協・書籍部」と表現する。
- 2) 寺尾正俊 (2011)「先輩方の頑張りの上に今大学生協の書籍事業があることを！-大学生協書籍事業の歴史と到達点-」『京都の大学生協史編集委員会会報』
- 3) ここでの書籍代は購入先を問わない。
- 4) ここでの統計は教科書・コミックを除く。
全国大学生生活協同組合連合会ホームページ「Book Best10」(<http://www.univcoop.or.jp/campus/book/best10.html>) 参照。
- 5) 姜政孝 (2011)「大学生協の読書推進活動 過去・現在・未来」『京都の大学生協史編集委員会会報』
- 6) 店舗によって、この特典の有無、内容は異なる。